

令和5年度

# かけがわ学力向上ものがたり

「夢に向かって、自ら考え自ら判断し、心豊かにたくましく生きる子ども」を育むために

「解決したい!」と学習問題に向かう真剣なまなざし。「できるようにになりたい!」と夢中になって取り組むときの表情。「よりよい考えを生み出したい!」と熱心に議論する姿。いつの時代も、こうした子どもたちの姿が変わることはありません。

『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して(令和3年1月26日中央教育審議会答申)』では、「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている」と、社会の変化に応じた教育観の転換について改めて示されました。

そこで、掛川市教育委員会では、「創像力」「創合力」「創律力」からなる「未来を切り拓く「3つの創る力」を令和3年度に生み出し、その育成に重点を置くこととしました。学習者である子どもが学びの中心にいることを改めて確認し、「3つの創る力」をどのように発揮させ、育成していくかを、市民総ぐるみで考え、議論してほしいと願っています。その上で、社会の変化に柔軟に対応し、たくましく、自分らしく生きていくことができる人を育ていけるよう、私たち大人も「3つの創る力」を発揮しながら、子どもの学びの伴走者となっていきましょう。

教育長 佐藤 嘉晃

令和5年3月  
掛川市教育委員会

# 目次

目次・・・1

序章「かけがわ学力向上ものがたり」策定のねらい・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第1章 掛川市が目指す「学力」とは・・・3

- 1 未来を切り拓く3つの創る力「創像力」「創合力」「創律力」
- 2 学習指導要領とのつながり
- 3 「かけがわ型スキル」

第2章「全国学力・学習状況調査」の結果から・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

- 1 現状と課題
- 2 学力の高い子「かけがわ家庭の学び」4つのポイント

第3章 学びのものがたり・・・7

- 1 新たな学びのスタンダード
- 2 地域の人に学ぶ活動の推進
- 3 読書活動の推進
- 4 プログラミング教育の充実
- 5 外国語教育の推進
- 6 中学校区学園化構想を生かした教育の推進
- 7 全国学力・学習状況調査結果の活用
- 8 市指定研究校による研究成果の共有
- 9 学力向上指標

第4章 令和の家庭のものがたり・・・15

- 1 家庭の学びの在り方の研究
- 2 かけがわ家庭の学びグランドデザイン
- 3 子どもが「創る」学びを学校と家庭が一体となって支える

第5章 我が校のものがたり(別冊)・・・19

研修テーマ ※ 別冊は、各校で作成。

【リーフレット】 授業改善支援資料「3つの創る力」発揮の授業へ

## 序章「かけがわ学力向上ものがたり」策定のねらい

掛川市では、子どもたちが『希望』を持ち、夢や目標に向かって自分を磨くことができ、掛川に誇りと愛着を抱きながら、地域でも、グローバルにも活躍する人に、たくましく成長することを願って、『教育大綱かけがわ』を定めました。

この教育大綱のもと、掛川市教育委員会では、掛川市の教育振興基本計画「人づくり構想かけがわ」において、学校教育の基本目標を「夢に向かって、自ら考え自ら判断し、心豊かにたくましく生きる子どもの育成」としています。これを受け、各学校は、「人づくり構想かけがわ」の実現に向けて、子どもたちに基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うことに取り組んできました。しかし、学力の低下が大きな社会問題となる中、改めて、学力の捉え方や向上策、学校・家庭・地域の役割などが問われています。

こうした背景を受け、平成 26 年3月、掛川市教育委員会では、「学力」とは何かを学校・家庭・地域で共通理解をして、どのようにしたら学力の向上が図れるか、その理念や方法等を「ものがたり」としてまとめた「かけがわ学力向上ものがたり」を策定しました。さらに、令和3年6月、変化の激しい時代を生きる掛川市の子どもたちに付けたい「創像力」「創合力」「創律力」からなる未来を切り拓く「3つの創る力」を策定し、その育成に重点を置きました。

これを受け、各学校では、一人一台端末のICT環境を最大限活用し、カリキュラム・マネジメントを進める中で、「3つの創る力」を意図的、計画的に発揮させ、育成するため、これまで以上に「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図っています。

「かけがわ学力向上ものがたり」の構成は、序章「かけがわ学力向上ものがたり」策定のねらい、第1章「学力」とは、第2章「全国学力・学習状況調査」の結果から、第3章 学びのものがたり、第4章 令和の家庭のものがたり、第5章 我が校のものがたり(各学校で作成)となっています。

各学校においては、児童生徒の学習実態に基づいた学校独自の特色ある「我が校のものがたり」を作成し、それを基盤として全教職員が共通理解のもとに組織的な協働を図り、授業改善に向けて積極的に取り組むことが求められます。

何より子どもの「3つの創る力」を効果的に発揮させ、十分に育成していくためには、学校と家庭・地域、教育委員会が連携して取り組んでいくことが大切です。

今後、この「かけがわ学力向上ものがたり」が、各学校において「3つの創る力」の育成に取り組むもととなり、掛川の一人一人の子どもを育む教育活動の充実に資するものとなることを期待します。

# 第1章 掛川市が目指す「学力」とは

## 1 未来を切り拓く3つの創る力「創像力」「創合力」「創律力」

掛川市ではこれまで、子どもたちが自発的に「かけがわ型スキル」を発揮しながら学べるよう働きかけ、成長を促してきました。この成果は、全国学力・学習状況調査においても良い結果としてあらわれており、確実に学力を伸ばしてきています。

そのような中、『「令和の日本型学校教育の構築を目指して」(令和3年1月26日中央教育審議会答申)』が示されました。その中で、急激に変化する時代の中、育むべき資質・能力として、「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。」とされています。

これを受け、掛川市として、未来を担う子どもたちのためにどのような「力」を育む必要があるのかを検討し、以下の未来を切り拓く「3つの創る力」に集約しました。

### 未来を切り拓く「3つの創る力」

「創像力」:先を見通し、考えを収集・分析・整理・統合しながら、新たな価値を生み出していく力

「創合力」:多様な他者と力を合わせ、物事を様々な視点から見つめ、試行錯誤しながら協働する力

「創律力」:自分を見つめつつ、自覚と責任をもち、自ら課題を見つけ、学び、行動し続ける力

これからの変化の激しい社会を生き抜いていく子どもたちが、自己の可能性を見だし、よりよい未来を創る担い手として、自らの行動に責任をもち、他者と協働しながら、主体的に考え、新たな価値を生み出し、学び続けていけるよう育てていくことが必要です。

そのために、学校教育においては、これまでの「学力観」を大転換し、授業、行事、係活動、児童会・生徒会活動等、教育活動全体を通して、未来を切り拓く「3つの創る力」を身に付けられるようにしていきます。さらには、家庭や地域を含め、市民総ぐるみで子どもたちを育てていけるよう働きかけていきます。

### お茶の実デザイン



## 2 学習指導要領とのつながり

学習指導要領において、「確かな学力」とは、『知識や技能に加えて、学ぶ意欲や、自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力等までを含めたものを指します。』と書かれています。さらに、新しい時代に必要となる資質・能力として、次の三つの柱が提示されています。

- ① 生きて働く「知識・技能」の習得
- ② 未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成
- ③ 学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養

新しい価値を生み出すために情報を収集・整理・分析・統合しながら（創像力）、多様な他者と協働し（創合力）、学び続ける（創律力）ような経験を繰り返す中で、学習指導要領で示された「確かな学力」、そして新しい時代に必要となる資質・能力を確実に身に付けられます。授業者は、子どもたちがこれらの資質・能力を繰り返し発揮できるような学びの場を、意識して提供し続けなくてはなりません。

「何を教えるか」だけではなく、子どもたちが「何ができるようになるか」という学習者の視点を大切に授業観をもち、最先端の ICT 環境を生かすことで、未来を切り拓く「3つの創る力」を育むための授業を目指します。



※『かけがわ型GIGAスクール構想』から

### かけがわ学力向上宣言

～未来を切り拓く「3つの創る力」を意識することを通して～

その1 生きて働く知識・技能を身に付けます。

その2 未知の状況に対応できる思考力・判断力・表現力を身に付けます。

その3 学びを社会や自分の人生に生かそうとする学びに向かう力や人間性を身に付けます。

## 3 「かけがわ型スキル」

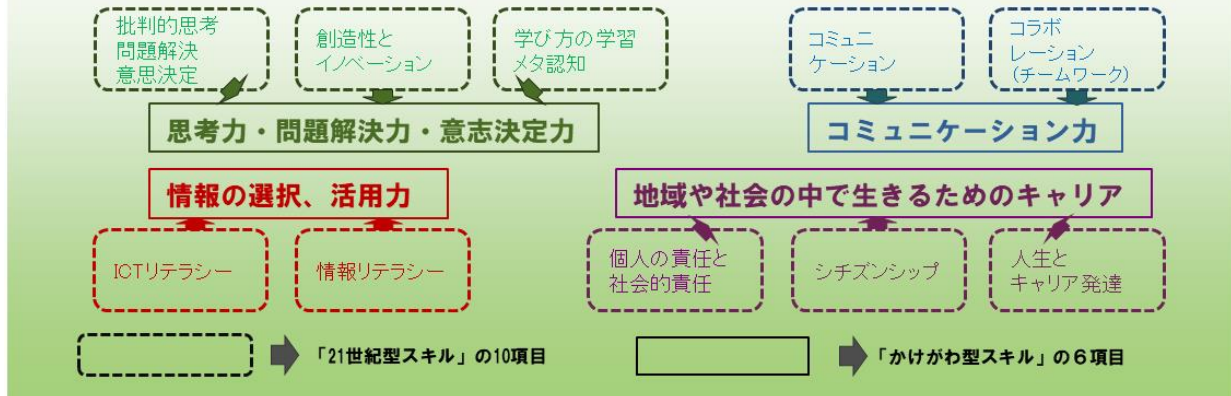
掛川市では、これからのグローバル社会を生き抜くために求められる思考力や問題解決能力、人とかかわるコミュニケーション能力など、これからの時代を担う子どもたちが身に付けるべき「21世紀型スキル※」を参考にして、「かけがわ型スキル」6項目を定めています。このかけがわ型スキルを授業や行事など、すべての教育活動の中で子どもたちが自発的に発揮できるように働きかけることを通して、未来を切り拓く「3つの創る力」を育みます。9年間の義務教育の中で大きく成長させます。

- 「かけがわ型スキル」とは…
- |        |                     |
|--------|---------------------|
| ①思考力   | ④コミュニケーション力         |
| ②問題解決力 | ⑤情報の選択・活用力          |
| ③意思決定力 | ⑥地域や社会の中で生きるためのキャリア |

※世界の教育関係者らが立ち上げた国際団体「ATC21s」(The Assessment and Teaching of 21st-Century Skills=21世紀型スキル効果測定プロジェクト)が提唱する概念。

## 「かけがわ型スキル」と「21世紀型スキル」

「かけがわ型スキル」は、「21世紀型スキル」を参考にして、大切にしたいスキルを、分かりやすい言葉を使って示しました。



「3つの  
創る力」  
との関連



育む学校教育  
～かけがわ茶  
モデル～



## 第2章「全国学力・学習状況調査」の結果から

### 1 現状と課題 →授業改善に向け、リーフレット『「3つの創る力」発揮の授業へ』参照。

新型コロナウイルス感染症や GIGA スクール構想など、現在の社会には急激な変化が起きており、周りの状況の変化や環境に適応しながら、困難な状況に立ち向かうことのできる人間の育成がより一層求められています。掛川市では、21世紀を生き抜く子どもたちが、思考力・問題解決力・意思決定力、コミュニケーション力、情報の選択・活用力、地域や社会の中で生きるためのキャリアといった「かけがわ型スキル」を身に付けられるように、学校だけでなく、家庭・地域等が連携して市民総ぐるみの教育を進めています。

全国学力・学習状況調査結果から、教育及び教育施策の改善、児童生徒の全般的な学習状況の改善等につなげていくことが重要です。令和4年度の結果の概要は、以下のようになります。

※全国・県の平均正答率を100とした場合の市の平均正答率の指標値

【小学校】	小学校 国語	小学校 算数	小学校 理科
県比較指標値	100	102	105
全国比較指標値	101	101	103
【中学校】	中学校 国語	中学校 数学	中学校 理科
県比較指標値	101	102	101
全国比較指標値	103	107	105

小学校では、全国との比較においては、各教科ともに全国の平均正答率を上回りました。また、県との比較においても、各教科ともにほぼ同じか上回りました。

中学校では、全国との比較においては、各教科ともに全国の平均正答率を2ポイントから3ポイント上回りました。また、県との比較においても、各教科ともに上回りました。

### 2 学力の高い子「かけがわ家庭の学び」4つのポイント

「児童生徒質問紙」と「学力」の相関関係を見ると、次のような子どもが、国語や算数・数学、理科の平均正答率が高い傾向にありました。この4つのポイントを意識して、家庭、地域と連携していくことが大切です。

児童生徒質問紙の項目から	4つのポイント
<ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 自分には、よいところがあると思う。</li> <li>◎ 自分と違う意見について考えるのは楽しいと思う。</li> <li>◎ 自分でやると決めたことは、やり遂げるようにする。</li> </ul>	<b>家族団らん・前向きな心</b> ～プラスに考えよう～
<ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 地域の行事に参加している。</li> <li>◎ 地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがある。</li> </ul>	<b>地域と共に</b> ～身近な「ひと・もの・こと」から学ぼう～
<ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 朝食を毎日食べている。</li> <li>◎ 平日の1日当たりのゲーム時間が1時間より少ない。</li> <li>◎ 学習した内容について、分かった点やよく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができている。</li> </ul>	<b>よりよい習慣づくり</b> ～生活や学び方を見直そう～
<ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 読書を1日10分以上している。</li> <li>◎ 新聞を読んでいる。</li> <li>◎ 読書が好き</li> </ul>	<b>じっくり読書</b> ～読解力・語彙力を磨こう～

# 第3章 学びのものがたり

## 1 新たな学びのスタンダード

全国学力・学習状況調査の結果からも明らかであるように、掛川市の学力は高い水準を維持しています。これは、各校が授業改善のための研修を積み重ねた結果であります。

令和3年度、掛川市内のすべての小中学校において一人一台端末と高速通信ネットワークが本格稼働を開始し、学校教育は大きな転換点を迎えました。教師が使う ICT から児童生徒が使う ICT へ、この一人一台端末は、これまで、時間やモノの制約によってチャレンジすることができなかった新たな学びを実現するものになります。

これからの ICT は主体性を引き出すためのツールとして、創造性のある対話を生み出すツールとして、また、深い学びへ導くためのツールとして、一人一台端末や高速ネットワークが子どもたちの学びを支えます。そして、鉛筆やノート、ホワイトボードなどと同じように、子どもたちがいつでも使える学びのマストアイテムになります。

これまでの授業改善の取組を大切にしながら、21世紀を生き抜く子どもたちが「3つの創る力」を発揮させるために、ICT を活用した「新たな学びのスタンダード」を実践することで、リアルとオンラインのハイブリッド型授業を目指します。



新たな学びのスタンダードを実践するための単元・授業設計の視点

### (1) 「3つの創る力」育成のための指導の重点

これまでの新たな学びのプロセスを基盤とした授業改善により、子どもの追究する時間が十分に確保される授業が多く見られるようになりました。しかし、教師の一方的な説明や「～しよう」の働きかけに応じるだけで授業が進み、子どもの問いや意欲が生まれず、主体的に学ぶ姿が見られない授業もあります。



「3つの創る力」を育む教師は、指導観を大きく転換し、子どもがもつ自ら学ぶ力を信じ、その学びを引き出し、促進する「ファシリテーター」として、資料提示、教具、発問など、子どもの思いに寄り添った仕掛けを行うスキルを高めていくことが求められます。また、「付けたい力」を明確にし、一人一人の学び方の違いを丁寧に見取ることで、「なぜ～だろうか」「どのように～すればよいのか」「もっと～したい」など、子どもの問いや意欲が生まれ、切れ目なく続いていくような単元・授業を構想し、子どもたちが自発的に「3つの創る力」を発揮して学ぶような学習活動を展開する必要があります。

一見うまくいったように見える授業でも、知識や技能が定着していなかったり、思考力や判断力、表現力が高まっていなかったり、子どもが主体的に学習に取り組む態度が十分に養われていなかったりすることもあります。一人一人の子どもが本時の授業で学んだことを振り返ることなく授業を終えてしまえば、教師が指導の成果を振り返ることができないばかりでなく、子どもも付いた力を実感できません。子ども一人一人の学びの過程を大切にしながら、「本当に付けたい力が付いたのか」という視点を常にもち、教師も子どもも適切な学習評価を行うことのできる時間を確保する必要があります。

さらに、令和3年度より、すべての小中学校に一人一台端末が整備されました。この新たなテクノロジーは子どもの主体性をより一層引き出すことが可能になるだけでなく、各教科の本質的な学びをさらに深めることが可能になります。

以上のことから、掛川市では以下の3つを重点指導項目として掲げ、未来を切り拓く「3つの創る力」の育成をより一層推し進めます。

## 重点指導項目

### ①「つかむ」…子どもの主体性を引き出す導入の工夫

「考えたい」「伝えたい」「やってみたい」「比べたい」「調べたい」…など、子どもの「～したい」を引き出すように仕掛ける。

教師の一方的な知識伝達のような子どもが受け身で学ぶ授業では、未来の社会に生きる「3つの創る力」は発揮されにくいことを認識し、子どもが自らの意志で学びに向かうことができるように、一人一人の学び方の違いを丁寧に見取り、教師は資料提示や教具、発問など、子どもの思いに寄り添った授業の仕掛けを構想する。

特に、ICT は子どもの「～したい」を引き出す有効なツールである。インターネット、デジタル教材などを活用し、短い時間で子どもの問いを学級全体で共有させる。

#### 問いを引き出す

- ・ 導入の工夫
- ・ ICTの活用

短時間で子どもの  
「～したい」  
が生まれる



「なぜ…なのかな。」  
「どうすれば…」  
「～を考えたいな。」

P.7「新たな学びのスタンダード」より

### ②「追究する」…主体的・対話的で深い学びのためのICT活用

一人一台端末の整備により、これまで以上に子どもの学び方や意見の多様性を可視化することが容易になる。写真や動画などの端末の機能を用いて、教師が子どもの学びの姿を記録して他の子どもの端末にデータ送信したり、子ども自身が自分や他者の学びの姿を記録し、他者と共有したりする

など、テクノロジーを使って自分の考えを他者の考えと対比する場面を設けることで、自分の知識や技能、考え方や表現がよりよくなることを実感させる。

#### 学び方の工夫

- ・ 学習形態の工夫
- ・ ICT、教具の利用



#### 教師の働きかけ

- ・ 補助発問、指示
- ・ 個に応じた支援



「自分の考えは他の考えと比べてどうだろうか？比較したいな。」  
「あっ！そうか。その考え方は思いつかなかった。なるほど…」  
「もっとこうしてみたらどうだろうか。提案してみよう。」

P.7「新たな学びのスタンダード」より



また、各教科や総合的な学習の時間の内容によっては、地域の人材や専門家らとオンラインで連携し、子どもが新たな見方や考え方を獲得し、学びを深めることができるようにする。

	つかむ	追究する	振り返る
ICT の 活用	<b>効果的に問いを共有</b> ・画像、動画の活用 ・大きく映す etc. 	<b>考える材料の確保・多様性の可視化・学習活動の記録</b> ・インターネット活用 ・資料の共有 ・端末画面の共有 ・アプリ活用 ・写真、動画撮影  	<b>教師へ学習記録の送信 学習記録のデータ保存</b> etc.  
	P.7「新たな学びのスタンダード」より		

### ③「振り返る」・・・学びを実感する振り返りの充実

子どもがわかったことを自分なりにまとめたり、新たな疑問を生み出したりできるように、学びを実感したり調整したりする学習改善の場を適切に設ける。また、子どもの振り返りの姿から、教師は授業を振り返り、指導を改善したり、個への支援へつなげたりする。そのために、記録に残す評価や子どもを見取る評価など、振り返りの内容や方法を吟味し、単元計画に適切に位置づける。(指導と評価の一体化)

**振り返りの充実**

- ・教師は授業改善と支援  
 「～さんは・・・ができなくて悩んでいるな。次回はこの資料を活用して支援しよう。」
- ・子どもは付いた力の実感と自分の学習の調整  
 「～ができるようになった。」  
 「～はなぜ・・・なのかな？もう少し考えたいなあ。」

P.7「新たな学びのスタンダード」より

なお、一人一台端末を活用することで、学びのあしあと(学習履歴)をデータ保存し、学びの成果を教師と共有することが可能となる。特に、撮影機能を用いることで、実物や動き、音など、これまで残すことができなかった学びのあしあとを記録することができる。

そして、子どもが振り返ったことをもとに、さらに追究を進めたり技能を高めたりできるように、次の授業や家庭学習へとつなげる。

また、学習支援ソフトウェア(ドリル教材や確認教材など)を用いることで、子どもは自己の課題に応じた学習に取り組むことができたり、教師は子どもの学習状況から適切な支援ができたりするなど、個別最適な学びを実現することが可能となる。

## (2) ICT を活用した学びのユニバーサルデザイン

わかりやすい授業をつかっていくために、個々の児童生徒の得意なこと、苦手なことを理解した上で、一人一人に適した支援を考えることが大切です。

ユニバーサルデザインの考え方と共に、ICTを活用し、児童生徒の様々な困難を取り除いたり減らしたりすることにより、児童生徒の可能性を広げることが期待できます。

### ア 本時で何を学習するのか、何を考えさせるのかをはっきりさせる「焦点化」

#### ・見通しをもたせる工夫

(例) 実験や実技において、作業手順や方法を見せるために一人一台端末やプロジェクタ等を使って、拡大提示することで、見通しをもたせる。

#### ・子どもたちが解決したくなるような「問い」の設定

(例) 言葉と併せて視覚的な指示や教材提示をすることで、興味を引き付け問いに対する焦点化を促す。

### イ 子どもの思考を助けるように、学習している内容をわかりやすく表す「視覚化」

#### ・教材や教具の工夫、板書の構造化

(例) タブレットPCや実物投影機等のズーム機能で、教材を大きく、わかりやすく投影し、興味を引き付けながら視覚的に思考を促したり理解を深めさせたりする。

ウ 個々の考え方を認め、よりよい支援や授業展開を考える「個への対応」

・困り感や特性に応じた個への支援、授業形態の工夫

(例) 読み書きへの不安がある場合、一人一台端末を活用して、読み書きの作業自体の過程を支援する。

・時間の見通しをもたせる工夫

(例) 集中を持続させたり、気持ちの切り替えをさせたりするために、残り時間が視覚的に把握できるように ICT を活用する。

・発表時の一人一台端末の画面を表示

(例) 発表者は話しやすくなり、聞き手も集中しやすくなるように、ICTを活用する。

### (3) 言語活動の充実

児童生徒が、「3つの創る力」を身に付け、豊かにかかわり合うことのできる力を高めるためには、全ての教科等で「書く」「話す・聞く」「読む」の言語活動を充実させる必要があります。その際、各教科等のねらいの達成に向けて学習過程に適切に位置付けます。

### (4) 一人一台端末及びインターネット環境によって可能な

#### 各教科共通の学習展開例

GIGA スクール構想の進展により、授業スタイルは大きく変化することとなりました。特に一人一台端末は、個別最適な学びの必須アイテムとなり、主体的・対話的で深い学びを展開していく上でも効果の高いツールです。従来は、教員の ICT 活用が中心となってきましたが、今後は子どもたちの ICT 活用を中心とした学習を考える必要があります。以下は、一人一台端末及びインターネット環境を活用した各教科共通の学習展開例です。

ア Google classroom 等の授業支援ソフトウェアを利用してワークシートの配信、回収、集計、評価

イ 子ども個々の学習記録をデータで蓄積、進捗状況チェック、学習状況に応じた支援の提供

ウ 画面共有、同時編集、個人作成データを一つにまとめる、画面上での小集団活動など、協働学習ソフトウェアの活用

エ 遠隔地とのオンライン会議、学校外の専門家との意見交換、他の学校との合同授業などリアルタイムで外部と交流する遠隔学習

オ 学習ドリルと連動した家庭学習の提供、端末持ち帰りによる課題処理、反転学習による授業展開の工夫

カ 動画撮影、動画編集、記録データの集計・加工、意見のデジタル化と分類、繰り返し再生、スロー再生、遅延再生、拡大縮小、複数の資料を比較、作業の自動化など ICT ならではの機能を活用

キ インターネットによる情報収集、調査活動、資料データの加工、表現活動の工夫

ク アンケート機能を利用して意見集計及びリアルタイムでの結果提供

ケ 子どもたちへのメッセージ配信及び回収、個々への適切な指導・支援

コ 学習者用デジタル教科書や学習を効果的に支援するアプリやツールの利用

参考資料：子どもたちの個別最適な学び、協働的な学びを創る【Ver.2】

☆参考『教育の情報化に関する手引』（文部科学省 令和2年6月追補版）から

学校におけるICTを活用した学習場面					
A 一斉学習		B 個別学習		C 協働学習	
<p>挿絵や写真等を拡大・縮小、画面への書き込み等を活用して分かりやすく説明することにより、子供たちの興味・関心を高めることが可能となる。</p>		<p>デジタル教材などの活用により、自らの疑問について深く調べることや、自分に合った進度で学習することが容易となる。また、一人一人の学習進度を把握することにより、個々の理解や関心の程度に応じた学びを構築することが可能となる。</p>		<p>タブレットPCや電子黒板等を活用し、教室内の授業や他地域・海外の学校との交流学習において子供同士による意見交換、発表などお互いを高めあう学びを通じて、思考力、判断力、表現力などを育成することが可能となる。</p>	
<p>A1 教師による教材の提示</p>  <p>画像の拡大提示や書き込み、音声、動画などの活用</p>		<p>B1 個に応じた学習</p>  <p>一人一人の習熟の程度等に応じた学習</p>		<p>B2 調査活動</p>  <p>インターネットを用いた情報収集、写真や動画等による記録</p>	
<p>B3 思考を深める学習</p>  <p>シミュレーションなどのデジタル教材を用いた思考を深める学習</p>		<p>B4 表現・制作</p>  <p>マルチメディアを用いた資料、作品の制作</p>		<p>B5 家庭学習</p>  <p>情報端末の持ち帰りによる家庭学習</p>	
				<p>C1 発表や話し合い</p>  <p>グループや学級全体での発表・話し合い</p>	
				<p>C2 協働での意見整理</p>  <p>複数の意見・考えを議論して整理</p>	
				<p>C3 協働制作</p>  <p>グループでの分担、協働による作品の制作</p>	
				<p>C4 学校の壁を越えた学習</p>  <p>遠隔地や海外の学校等との交流授業</p>	

## 2 地域の人に学ぶ活動の推進

- (1) 多くの専門的知見をもつ地域の人から学ぶ活動を積極的に取り入れ、本物の体験活動等を通して「3つの創る力」を養う。
- (2) 地域ボランティアや退職教員等による放課後の学習指導等、地域との連携を積極的に行って学習支援を工夫する。
- (3) 学校の特色や地域の実情を踏まえつつ、子どもたちの発達段階にふさわしいキャリア教育やかけがわ道徳を実践し、充実させる。

## 3 読書活動の推進

- (1) 学校図書館の整備を計画的に行うとともに、地域ボランティアや学校司書と連携し、朝読書や読み聞かせ、ブックトークなど、読書に親しむ時間を確保したり、学習・情報センターとしての機能を有する学校図書館を活用した授業を実践したりして、「3つの創る力」を養う。
- (2) 図書だけでなく、新聞にも積極的に触れさせることで、広い視野に立ったものの見方や考え方ができる子どもを育てる。
- (3) 読書、読み聞かせなどを推進すると共に、家庭での読書活動を充実するよう働きかけることで、読書好きな子どもを増やす。

## 4 プログラミング教育の充実

- (1) 課題や目的に応じて、意図した処理を行うようコンピュータに指示する体験をさせながら、課題の解決や意図する活動を実現するために一つ一つの動きを組み合わせ、論理的に考えていく力の育成を図る。
- (2) 各教科やその他の様々な学習において、(1)で身に付けた論理的思考力を発揮できるように、課題や発問、学習活動を工夫する。

## 5 外国語教育の推進

- (1) グローバル化する社会で様々な文化や歴史を有する国の人と関わり合うために、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。
- (2) 『新かけがわスタンダード』を活用し、小・中学校の接続を意識した、一貫性のある英語教育に取り組む。
- (3) 中学校英語科主任を中心として、教科書を効果的に活用した授業づくりに関する研修を充実させ、学習指導要領に対応した授業改善を図る。

## 6 中学校区学園化構想を生かした教育の推進

- (1) 各学園で目指す子ども像を共有し、『掛川市の小中一貫教育—かけがわ型小中一貫カリキュラム—』に示した9年間の連続性、系統性を意識した指導を小中学校が連携して行う。
- (2) 情報交換や情報共有、専門的な知識や指導の交流等を進めることで、指導を充実させ、学力や学習意欲の向上を図る。

## 7 全国学力・学習状況調査結果の活用

- (1) 全国学力・学習状況調査の問題や結果を活用した校内研修を通して、求められている学力を教員が具体的に把握し、授業改善に取り組む。
- (2) 「チア・アップシート」や「チア・アップコンテンツ」等を活用し、児童生徒の読解力を養う。

## 8 市指定研究校による研究成果の共有

- ・ 中央小学校 西中学校「働き方改革」(令和2・3・4年度)
- ・ 第一小学校 東中学校「ICT活用」(令和3・4・5年度)

## 9 学力向上指標(4年間の推移)【◎:目標値を超えた数値 ↑:前回から上昇が見られた数値】

※「全国学力・学習状況調査」における児童生徒質問紙調査から、最も肯定的な回答の割合

- (1) 「3つの創る力」につながる授業づくり

ア 国語の授業の内容がよくわかると答える児童生徒の割合

	小学校	中学校
<b>目標値</b>	<b>30%以上</b>	<b>25%以上</b>
令和4年度	◎33.5%	◎29.0%
令和3年度	◎37.4%↑	◎32.8%↑
令和2年度	新型コロナウイルスの影響により調査中止	
令和元年度	◎37.3%↑	◎29.7%

イ 算数・数学の授業の内容がよくわかると答える児童生徒の割合

	小学校	中学校
<b>目標値</b>	<b>46%以上</b>	<b>37%以上</b>
令和4年度	41.6%	36.0%
令和3年度	◎49.7%↑	◎38.3%↑
令和2年度	新型コロナウイルスの影響により調査中止	
令和元年度	◎47.2%↑	36.4%↑

(2) 読解力を付ける

ア 学習指導要領の領域等における「話すこと・聞くこと」に関する平均正答率

	小学校	中学校
<b>目標値</b>	<b>県の平均正答率以上</b>	
令和4年度	◎68.5%	◎66.3%
令和3年度	◎78.3%↑	◎82.9%↑
令和2年度	新型コロナウイルスの影響により調査中止	
令和元年度	75.3%	◎75.6%

イ 学習指導要領の領域等における「読むこと」に関する平均正答率

	小学校	中学校
<b>目標値</b>	<b>県の平均正答率以上</b>	
令和4年度	◎66.8%↑	◎71.9%↑
令和3年度	47.7%	◎50.1%
令和2年度	新型コロナウイルスの影響により調査中止	
令和元年度	83.4%	◎75.5%

(3) 「かけがわ道德」を核とした人づくり

ア 「難しいことでも、失敗をおそれないで挑戦する」と答える児童生徒の割合

	小学校	中学校
<b>目標値</b>	<b>24%以上</b>	<b>22%以上</b>
令和4年度	22.3%	◎24.2%↑
令和3年度	23.7%	◎23.3%↑
令和2年度	新型コロナウイルスの影響により調査中止	
令和元年度	◎28.5%↑	◎23.1%

イ 「人の役に立つ人間になりたいと思う」と答える児童生徒の割合

	小学校	中学校
<b>目標値</b>	<b>70%以上</b>	<b>75%以上</b>
令和4年度	◎73.5%	◎83.2%↑
令和3年度	◎74.8%	◎79.9%↑
令和2年度	新型コロナウイルスの影響により調査中止	
令和元年度	◎78.8%↑	◎77.8%↑

ウ 「将来の夢や目標をもっている」と答える児童生徒の割合

	小学校	中学校
<b>目標値</b>	<b>72%以上</b>	<b>51%以上</b>
令和4年度	56.4%	42.3%
令和3年度	58.0%	44.4%
令和2年度	新型コロナウイルスの影響により調査中止	
令和元年度	65.0%	47.8%↑

(4) 家庭での学習習慣を身に付ける

「家で、自分で計画を立てて勉強をしている」と答える児童生徒の割合

	小学校	中学校
<b>目標値</b>	<b>26%以上</b>	<b>18%以上</b>
令和4年度	19.8%	15.7%
令和3年度	◎28.5%	◎18.5%↑
令和2年度	新型コロナウイルスの影響により調査中止	
令和元年度	◎33.1%↑	13.6%

(5) 本に親しみ、読書習慣を身に付ける

家や図書館で、普段(月～金曜日)、1日当たり30分以上読書する児童生徒の割合

	小学校	中学校
<b>目標値</b>	<b>37%以上</b>	<b>35%以上</b>
令和4年度	33.8%	32.3%↑
令和3年度	35.2%	29.4%
令和2年度	新型コロナウイルスの影響により調査中止	
令和元年度	◎42.2%	29.7%

## 第4章 令和の家庭のものがたり

### 1 家庭の学びの在り方の研究

掛川市の各学校では、家庭教育支援資料『かけがわの子どもたち』を活用し、家庭での取組を働きかけ、各家庭においては、「子どもの力を伸ばす!家庭教育4つのポイント」を視点に「家庭のものがたり」の実践を進めてきました。

令和2年度末、掛川市のすべての学校に一人一台端末が整備されました。各学校では、かけがわ型GIGAスクール構想のもと、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指しています。子どもの学力や未来への可能性を最大限に引き出すためには、学びを学校に閉じることなく、家庭や地域でも学ぶことができる環境を整える必要があります。また、乳幼児期から義務教育終了(0~15歳)までにおける子どもの成長には、家庭の役割は大変重要であるため、小学校教育との円滑な接続を図るなど園小中一貫教育を推進する中で、家庭・地域との一層の連携、協働を進め、市民総ぐるみで支えていくことも重要です。

そこで、掛川市では、子どものもつ自ら学ぶ力を信じ、学校、家庭、地域が相互に連携してその学びを支えることができるように、掛川市における家庭での学びの在り方について研究し、その全体構想を『かけがわ家庭の学びグランドデザイン』として表しました。これを十分に活用して、子ども自らの学びを引き出すための望ましい家庭のかかわり方や地域の役割について理解を深め、市民総ぐるみで家庭の学びについて考え、新しい「家庭のものがたり」をつくっていきましょう。

### 2 かけがわ家庭の学びグランドデザイン





(1) 大切にしたい見方・考え方

ア 子どもは自ら学ぶ力を持ち、その学びは園・学校で閉じることなく切れ目なく続く。

(子どもの学びが土台)

イ 子ども自らの学びは、乳児期から始まり、家庭のかかわりにより引き上げられていく。

ウ 家庭のかかわりは、子ども自らの学びの広がりに合わせて変化していく。

(2) 「3つの創る力」を伸ばす子ども自らの学び

乳児期(学びの土台 愛情いっぱい): 心と体で感じる【身近な環境から学ぶ】

スキンシップや温かな表情、言葉かけから、「自分が大切にされていること」を感じ取り、親子の愛着が形成されます。そうしてたくさんの愛情を感じることで、他者を信頼し、安心して周りのひと・もの・ことに働きかけられるようになる土台がつくられます。

幼児期(学びの芽生え 興味いっぱい): 夢中になって遊ぶ【遊び・体験から学ぶ】

乳児期に獲得した安心感・信頼感を基盤に、興味や関心を広げていきます。この時期の遊びは「やってみたい」という思いを基に、頭も心も体も繰り返し動かすことで、学びの芽生えへとつながっていきます。

児童期(自覚的な学び やる気いっぱい): 進んで問題解決に取り組む【仲間・地域から学ぶ】

幼児期までに体験を通して獲得した自信や他者を大切にする気持ちを基に、自分の取り組むべき課題を自覚して学びを進めます。その際、解決に向けて仲間と協力したり、進み具合を確かめ改善したりすることで、より意欲的に追究するようになっていきます。

青年期(創造的な学び 夢いっぱい): 夢に向かって挑戦する【多様な環境から学ぶ】

児童期までに少しずつ発揮し続け、育んできた「3つの創る力」をより効果的に働かせながら学んでいきます。自分の将来の夢や地域の課題など正解のない問題にも、最適解や納得解を生み出そうと取り組みます。

(3) 子ども自らの学びを引き出す家庭のかかわり(※「」内は、かかわり方のポイント)

・乳児期: 心と体でふれあおう

「笑顔・スキンシップ・語りかけ」

・幼児期: 思いを受け止め、一緒に行動しよう

「過程をほめる・目を見て聴く、話す・成長を喜び合う」

・児童期: 成長を認めて、寄り添おう

「相談にのる・一緒に考える・共に成長を振り返る」

・青年期: 心をつないで、応援しよう

「経験を語らう・見守る・挑戦の後押しをする」

(4) 使用場面及び使用方法

ア 見通す: 子どもの学びと家庭のかかわりの変化、地域の役割等を大まかにつかむ。

イ 見取る: 子どもの学びの様子や自分のかかわり方を振り返り、これからについて考える。

ウ 見直す: グランドデザインを見て考えたことや気付いたことをもとに、他の人と語り合う。

### 3 子どもが「創る」学びを学校と家庭が一体となって支える

#### (1) かけがわ型学習スタイル「ライズスパイラル学習」



「第3章学びのものがたり 1(1)」において示した視点を基に、新たな学びのスタンダードを実践するための単元、授業設計モデルとして、家庭の学びグランドデザインの理念に照らし、学習者である子どもを中心として整理したものです。子ども自らの学びが、学校で閉じることなく切れ目なくつながり、家庭や教師の望ましいかかわりによってライズスパイラル(上昇らせん)を描きながら高まり、深まっていく様子を表しています。

#### ア 学びを“引き出す”ファシリテーターとしての家庭のかかわり

子どもの「個別最適な学び」「協働的な学び」「自己調整」を引き出し、学びが切れ目なく続いていくようにするために、子どもの学びに対する「～したい」という思いを認め、ファシリテーターとして一緒に考えようと寄り添うかかわりが大切です。

#### イ 学びを“つなげる”ファシリテーターとしての教師のかかわり

子どもの「個別最適な学び」「協働的な学び」「自己調整」を支え、促すことで、子どもの学びに対する「～したい」という思いが授業前後でつながり、ふくらんでいくように、ファシリテーターとして問いかけたり子どもの発言に対して切り返したり価値付けたりすることが大切です。

## (2) 関連資料

家庭の学びグランドデザインのことや関連する内容、家庭でのかかわり方についてより詳しく知りたいときは、以下の資料を御参照ください。

① かけがわ家庭の学びポータル

： 家庭の学びに関するコンテンツやリンク集  
※以下、②～⑤のリンクもあります。



② 家庭の学びグランドデザインまるわかりガイド

： グランドデザインの見方・考え方



③ 家庭の学びファシリテーターのすゝめ

： 家庭の具体的なかかわり



④ 教えて!きんじろうさん

： 家庭の学びの意義や用語等の解説



⑤ かけがわ家庭の学び応援団

： 年齢や内容に応じた相談先一覧



## 第5章 『我が校のものがたり』（別冊）

各学校では、子どもたちが「3つの創る力」を身に付けるために、次のような様々な実践を積極的に進めてきました。これを参考に各学校が自校のものがたりをつくっています。

### 研修テーマ

#### 【令和4年度小学校】

進んでかかわり学び合う子の育成 ～深い学びを引き起こす、主体的な学び合いのある授業づくり～
進んでかかわり学び合う子の育成 ～教科の見方・考え方を働かせて学び合う授業づくり～
「話して 聞いて つながろう」
自ら学ぶ みんなと学ぶ授業づくり ～考え、伝え、つなげよう～
学びが深まる授業 ～iPadの活用～
「ともに学び合う」～1人1台端末を効果的に活用した学び合いの授業づくり～
根拠をもって判断し表現する力を育成する授業づくり
学びを深める子の育成 ～子ども中心の授業づくりを通して～
主体的に学びを深める子を育成する授業づくり
自ら学ぶ子の育成 ～子どもが、自らの力で解決に向かう授業～
理由や根拠をもって対話する児童の育成 ～主体的で対話的な学びができる児童を目指して～
1人1台PCを使った “きく” 授業
自分の考えをもち、学び合うことができる授業づくり
共によりよく生きようとする子の育成 ～子供たちが自ら学び続ける授業づくりを通して～
「～たい」でいっぱい授業 ～考えたくなる学習問題の設定を通して～
対話を通して考えを深める授業 ～自分から考えたくなる、伝えたくなる単元構想の工夫～
対話を通して考えを深める授業
対話を通して考えを深める授業
主体的に関わり合っ て 学びを深めていく子」の育成
主体的に学び合う子を育成するための教科指導の在り方
子供が自分の考えに自信を持って語れる授業 ～ 学習問題の工夫 ～
「根拠・理由を明確にして 自分の考えをもてる子」を育てる授業

#### 【令和4年度中学校】

進んでかかわり「学び合う」生徒の育成 ～生徒が学び合いたくなる問いの設定～
東中型 GIGA スクールの実現 ～協働的な学びや個別最適な学びの実践を通して～
自ら課題を解決する力の育成
未来へ一歩踏み出すために、主体的に探究し続ける姿を目指して ～PBL・探究的研修を用いた授業改善～
自ら考え 高め合う かしこい生徒 Ⅱ期「対話活動で互いを高め合える授業づくり」
自ら気づき 考えを深め 追究し続ける生徒の育成
「対話を通して考えを深める授業」 ～本時の目標を生徒と共有し、学習内容をアウトプットする活動を通して～
主体的・対話的で深い学びを目指して ～生徒自身が学びや変容を自覚できる授業づくり～
追究したい問いに対し、主体的に学ぶことができる生徒の育成